

一八九〇年代から一九六〇年代の印日民間交流

―ベンガルと日本の文化交流を中心に―

シュナイプ・ダス

キーワード…日印民間交流史、ロビンドロナト・タゴール、岡倉天心、パルク・ハリハラン、ムクル・デ、ホリプロバ・タケダ、ベンガルと日本の民間交流、近現代史

の研究はインド側はもちろん日本側でも研究はほんの少ししかないので出来るだけこういった光を当てられていない人を研究して再評価したいと試みた。¹

はじめに

本稿では印日交流史、ベンガル人との交流史を扱いタゴールと岡倉天心の出会いから始まる本格的な民間交流に大きな役割を果たした人物を取り上げたい。例えば陶芸との関係で来日したパルク・ハリハラン、美術家のムクル・デ、日本人と結婚したインド女性―ホリプロバ・タケダなどである。取り上げる人物について

宗教、信仰、文化、経済、政治に関する日印関係は一五〇〇年前に遡る。仏教、インド思想、ヒンドゥー教の神々、仮名、カレーなど多くのものが、インドから日本へ伝播した。例えば、インドの楽器のビーナは、中国を経て日本に来て琵琶となった。日本では、インドは天竺として知られていたが、インド人の多くは「日本」という国の名さえ知らなかった。いわば一方的な文化伝播と言えるだろう。

インド文化の日本文化への影響をさらにあげると、よく指摘さ

れるように、サンスクリット語字母表を起源として仮名の五十音図ができています。また、ラクシュミ女神が吉祥天、インドラが帝釈天、といったふうに名前を変えて、ヒンドゥー教の神々が仏の守護神として日本に入ってきて、信仰されている。江戸時代ごろ始まった祇園祭がインドに起源を持ち、インド更紗やベンガル由来の弁柄縞がオランダ人によって日本に伝来した。併せて、染め物の技術も伝わった。

明治時代、一八九三年、ベンガル人の、ヴィヴェーカーナンダが来日し、日本の知識人に強く影響を与えた。岡倉天心もその一人である。そこから始まる印日民間交流がある。思想家岡倉天心がインドを訪問滞在、タゴールと親交し、また、タゴールも日本へ深い関心を示し、五回来日した。

日本は、明治維新で近代国家になり、アジアに目を向けはじめ、一九〇四―〇五年の日露戦争が、英国からの独立運動中のインドに大きな希望を与えた。ベンガル人で「中村屋のカレー」でおなじみの「インド独立連盟」総裁ラスビハリ・ボースがインド独立運動に努め、国民会議派内の急進派スバースチャンドロ・ボースが日本の協力でインド国民軍を組織、インパール作戦を実施した。インドで大変敬愛されている独立運動家と日本が組んだことで、敗戦後の良好な日印関係の遠因となった。³ 昭和時代 中村

屋店主相馬愛蔵の娘俊子と結婚したラスビハリ・ボースが、「インド式カレー」は「恋と革命の味」と評判になった。また、画家の野生司香雪がサルナートの根本香室精舎の仏画を創作した。⁴

第二次世界大戦後、ついにインドは独立を達成し主権を獲得する一方、日本は敗戦で主権を失っていた。極東軍事裁判にてインド代表判事ラダ・ビノド・パール判事が日本人戦犯七人の全無罪論を主張したことは、日本はもちろん世界的にも知られている。彼はベンガルに生まれ育った。ネルー首相は、愛娘の名前をつけた象のインディラを上野動物園に寄贈し、日印の友好関係を象徴するものとなった。

一九七四年、インドは核実験を行い、それに反対する日本との関係は良好とはいえない難いものであった。近年では、両国の首脳が相互に訪問し合う友好関係が樹立されている。

一 ヴィヴェーカーナンダの来日、タゴールと天心の出会い

一八九三年、インドから日本にスピリチュアルなメッセージをもたらしたのは、スワームイー・ヴィヴェーカーナンダ（一八六三―一九〇二）であった。ヴィヴェーカーナンダの献身的な弟子であったジョセフィン・マクラウド（Josephine Macleod 一八五八―一九四九）はアメリカ人女性で、一九〇一年三月に日本美

術を学びに来日し、岡倉天心の授業も受けていた。そこで、ヴィヴェーカーナンダの業績と成功を実際に岡倉に伝え、それに影響された岡倉は渡印を計画した。一九〇二年一月六日、岡倉はタゴールの学園、シャンティニケタンにおける初めての外国人留学生となる堀至徳とジョセフ・マクラウドを伴って船でコルカタに着いた。そして直ぐに向かったのが、ハウラーのベルル・マト（ラーマクリシュナ・ミツシヨンのベルル僧院）で、そこにスワームイー・ヴィヴェーカーナンダとアイルランド出身の弟子シスター・ニヴェーディタ（一八六七—一九一一）を訪ねている。ヴィヴェーカーナンダに会い感激した岡倉は、自ら「東洋宗教会議」を構想し、招待状と小切手をヴィヴェーカーナンダに送った。しかし岡倉のコルカタ滞在中の七月、ヴィヴェーカーナンダは糖尿病を患っていて、肉体はやつれ果てていた。

だが、現地では予想外の出会いが待っていた。ニヴェーディタを通して岡倉はタゴール家との交友のきっかけを得る。その後、タゴール家との親交を深めていった。当時イギリスが支配していたインドに生きたベンガルの詩人ロビンドロナト・タゴールと明治日本の美術批評家岡倉覚三（天心）は、世紀初頭に同世代の知識人同士として出会った。

二 一九〇〇年初頭に日本に関する論評をしたベンガル人

非西洋人で初めてノーベル文学賞を受賞したタゴールが一九一六年五月二十九日に初来日して印日の民間交流は本格的なものとなった。彼によってベンガル語で書かれた“Japan Jatri”（日本への旅人）は一九一九年に *Sabujpatra*（緑色の葉）と言うベンガル語の雑誌に発表された。この著作は、土佐丸でタゴールがアメリカへ行く途中で来日し、三か月間滞在した際の体験記である。そこからは、日本で見聞きしたり体験したりした、日本人の丁寧さ、勤勉さ、日本の自然の美しさ、食生活・茶道・生け花・俳句・歌・踊りなど、日本文化の様々な側面について、彼が大変高く評価していることがよくわかる。

そのタゴールの来日以前のベンガル人と日本人の交流を見ると、一八九三年にヴィヴェーカーナンダがシカゴの宗教会議に行く途中日本を訪れた際に、日本に在住していたベンガル人がいたと語っていたことが指摘できる⁵⁾。

私は、以下にあげる、日本に関して当時のベンガル人が書いたベンガル語の著作を六点見つけた。十九世紀から二十世紀にかけてのベンガル文芸復興期のころ、日本に光を当てたこれらの論文、記事が雑誌などに発表され、書籍も刊行された。

一八六三年には、モドゥシュドン・ムケルジー (Madhusudan

Mukherjee) は、日本を開国させた米国から来航したペリーの著作の *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the Chinese Seas and Japan* をコルカタにおいて *Japan (sic)* というベンガル語の著作物に発表した⁶が、それはペリーが一八五三年に来日し、日本が開国するまでの出来事をまとめたものである。

また、一九〇六年にマンマタナト・ゴーシュとスレシユチョンドロ・ボンドパッダエ (Suresh Chandra Bandyopadhyay) が来日した。ボンドパッダエは、一九〇六年に *JAPAN: Sekaler Bangla Samojik Potre Japan* を刊行している。この本は、十九世紀終わりから二十世紀初期にかけての日本に関する新聞記事の編纂物で、内容的に前半と後半に分かれている。前半はインド独立前のベンガルと日本の歴史と文化の関係について述べている。そして後半には、日本人の生活、文化、社会について、ビノイクマル・シヨルカル、ムクル・デなどの優れた知識人が書いている。

マンマタナト・ゴーシュ (Mannathanath Ghosh 一八八二—一九四四) は、一九一〇年に *Japan Probash* (外国である日本) を刊行した。この本には、インドから海路で日本に来て、東京に住み、科学技術の専門学校に入り、石鹸、鉛筆、傘とガラスについて学んだこと、神戸に移り、ボタンの作り方、人工的な歯の作

り方も学んだことが書かれている。また、日本での日々について詳しく書かれている。ゴーシュにより一九一五年に *Nabbo Japan* (新しい日本) と *Supro Japan* (知られざる日本) も刊行された。同じく一九一五年に *Bongomohilar Japaniyatra* (あるベンガル夫人の日本訪問) が、日本人と結婚したベンガル人の女性のホリプロバ・タケダ (Horiprova Takeda 一八九〇—一九七二) により刊行された。彼女は一九二二年に来日した。この六十一ページの本は、山羊、羊そして乾燥した魚のにおいと一緒に過ごした船での日々、インドの楽器エスラージを弾いて楽しんだこと、日本人の義父・義母から温かい歓迎と愛情、日本人になったインド人である彼女への好奇心、日本での日常生活の出来事を綴ったものである。

続いて、ベンガル人女性のため尽力をし、女性教育のために一生を捧げたオボラ・ボースが一九一五年四月七日ごろ、横浜に着いた。一九一六年の初めころムクルというベンガル語雑誌に *Japan Bhromon* (日本訪問) が掲載された。

また、コルカタの社会学協会、ベンガル・アジア・アカデミーの設立者でもあった社会学者、愛国者、教授のビノイクマル・シヨルカル (Binaykumar Sarker 一八八七—一九四九) は一九一五年六月にホノルル経由で日本を訪れた。たった三か月の滞在

だったが日本での経験をもとに *Nobin Asiar jommodata Japan* (新しいアジアを興した日本) をベンガル語で一九二三年に刊行した。この本は、七章から成り、日本へ向かう船で過ごした日々、相撲、日本庭園、日本とインドの関係について書いている。その中で印象に残ったのは、日本はアジアの国々を勇気づけるだけではなく、インド、中国、アフガニスタン、エジプトの若者たちの導き手である、と述べていることである。⁷ ショルカルはまた一九一六年、タゴールの初来日の一か月後に中国経由で日本を訪れている。

三 陶芸家パルク・ハリハラン

インド南端トラバンコールに生まれたパルク・ハリハラン (Park Hariharan 一九〇五—一九七〇) は、昭和初期、陶芸家を目指して、タゴールによって創設されたシャンティニケタンの芸術学部に入學した。このシャンティニケタンで、ハリハランは既に日本訪問を果たしていたタゴールに会い、陶芸修行の地を探している旨を伝えた。その際にタゴールは日本を推薦したものと思われる。タゴールは日本滞在の折、直に日本の優れた陶芸技術に触れていた。また、ハリハランの訪日を推薦したことは、岡倉天心に同行して来た堀至徳がシャンティニケタンにおける最初の

外国人留学生となったことへの岡倉天心に対する答礼の意味合いがあつたのではないかと思われる。ハリハランは堀至徳と親しくなつたと思われる。ハリハランは、一九三〇(昭和五)年に二十五歳で陶磁器研究のため、渡日した。⁸

一九三〇年四月、東京の富本憲吉の内弟子になり、富本憲吉の工房で約二年間高度な陶芸技術を修得した。一九三二年、瀬戸に移り、社会奉仕活動家でもあつた名古屋松坂屋の初代社長の伊藤祐民(一八七八—一九四〇)の好意により、名古屋松坂屋の催事装飾課の嘱託員として、ハンドバッグ、和服、帯などの模様をインド風にデザインすることを通じて陶芸の修業に励んだ。名古屋の名士や顧客から好評を受け、銀座店ではこれらの作品展も開催した。

伊藤祐民の別荘「揚輝荘」は、大正から昭和初期にかけてお月見の名所として知られていた。また、海外からの要人、文化人をもてなす迎賓館、そして祐民が力を注いでいた国際交流に関わる留学生の寄宿舎としての役割を持つ文化交流の拠点だった。恵まれた環境でハリハランは働くことができたのである。

ハリハランは、日本でタゴールの期待に背かない優れた業績を残している。この時期の彼の業績の一つに、名古屋松坂屋所有の美術館「揚輝荘」に所蔵されている数点の大きな壁画がある。こ

れは現在も「揚輝荘」の常設展示物である。

続いて瀬戸で在来の陶磁器と名古屋で大量生産の陶器技術を修めた。その間、東京、大阪等の各地で個展も開き、研鑽を重ね陶磁器工芸の道に精進して来たが、インド本国に日本の優秀な現代工芸品が紹介されていないことを痛感し、自分の力でこの優れた芸術を母国に紹介したいと願っていた。

ハリハラは一九三三（昭和八）年二月十日愛知商品陳列所において「インドの趣味嗜好と日本輸出陶磁器」と題した講演会を行っている。それは、インド市場における日本陶磁器に対するインド人としての希望を具体的に説明したものである。

さらに、一九三四年十一月に祐民のインド仏蹟旅行にハリハラは通訳として参加し、帰国後、聴松閣地階のドライエリア、瞑想室などのタイル装飾に携わった。¹⁰ 揚輝荘の聴松閣の地階一七〇mに及ぶ謎の地下トンネルの入り口を囲むように配置された壁画は、その時訪れたアジャンタ石窟の壁画を模して描かれたものである。

祐民がインドへ仏教聖地巡礼に出かけた際、写真家の長谷川伝次郎を伴い、シャンティニケタンを訪れタゴールに会っている。その様子は、写真家長谷川伝次郎がフィルム映像に取り、現在も名古屋揚輝荘のアーカイヴに残されているが、動画に登場するタ

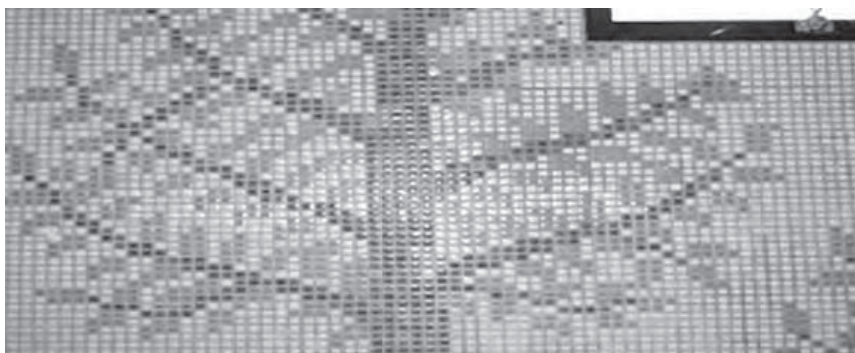


写真1 ドライエリア内部 菩提樹柄モザイクタイル

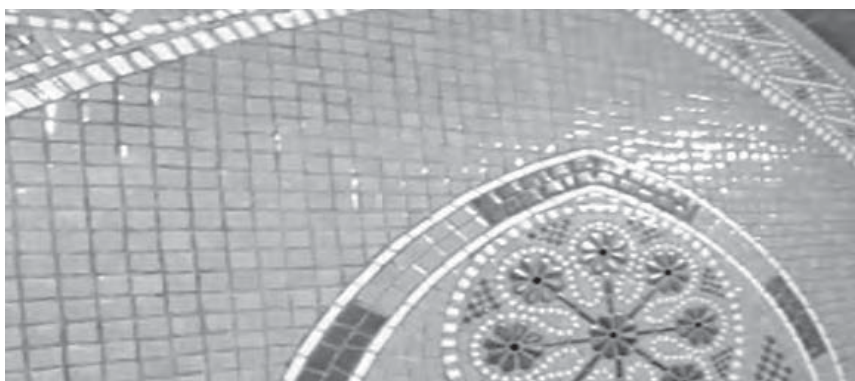


写真2 瞑想室装飾タイル

ゴールが見られる非常に貴重な記録である。

一九三八（昭和十三）年、ハリハランは、瀬戸品野町出身で、幼稚園の先生をしていた日本人の柴田聡子を妻に迎えて、一緒にインドのバンガロールに帰国した。その後インドの独立運動にも関わる。農村工芸の振興に尽力しつつ印日交流の懸け橋になった。一九六四年にハリハランはインド中央政府よりインド村落工芸品発展センターの所長に任命され、村落工芸品発展に尽力した。一九六四年に東京のインド大使館で開催された、インド工芸品の展示会でインド代表として重要な役割を果たした。

国画会の富本憲吉の門を叩いたハリハランは、日本で数回の個展も開き、大いに識者にも認められていた。彼は優秀な日本工芸品を携えて、インドを訪ね、各地を巡歴して展覧会を開催、日本の工芸を紹介しようと努力した。

「七年精進の印度青年母国へ工芸日本を紹介¹¹」という記事の中で、ハリハランは次のように語っている。

私は商売人ではありません、ほんとうの日本工芸美術品を印度人に見せて、何等か日本の文化発展に寄与出来たらこんな嬉しい事はありません、タゴールさんはもう齢ですし一年前松坂屋の伊藤次郎左衛門氏と渡印した時、翁自身もう一度近い中日本へ来たいと云っていましたが、来春来日の際何

んとかして同伴して来たいと思います、それから印度の昔の舞踊を日本に紹介する為め二十数名の男女舞踊団を連れて来たいとも考えています、何にしる金持ではない私、今回の此の企てには少なからず費用もかかります、日本文化連盟に御後援をお願いしましたが近い中、国際文化振興会の団伊能男に御目にかかつて、御援助を仰ぎたいと考えている次第です。彼は一九七〇（昭和四十五）年に六十五歳で亡くなった。だが、妻の聡子さんは日本に帰ることなく、二〇〇三（平成十五）年八十九歳でなくなるまで六十五年間、バンガロールを訪れる日本人の世話をし、印日交流に尽くした。

四 美術家のムクル・チョンドロ・デ

タゴールと岡倉天心の出会いをきっかけに、ベンガルと日本の間で様々な側面で交流が始まった。その一つは美術交流である。画家のオボンンドロナト・タゴール (Abanindranath Tagore、タゴールの甥)、ゴゲンドロナト・タゴール (Gogendranath Tagore、タゴールの甥)などが菱田春草や横山大観と関係を築いた¹²。後に、これら日本の画家たちとムクル・チョンドロ・デ (Mukul Chandra Dey 一八九五—一九八九) やノンドラル・ボース (Nandalal Bose 一八八二—一九六六) はより親密になった。

ムクル・デは現在のバングラデシユのシユリダルコラ (Sridhar-Khola) に誕生し、上から五番目の息子で、芸術的な雰囲気の家で育った。彼はシャンティニケタンで一九一一年から一九一六年までオボニンドロナト・タゴールから絵画を教わった。コルカタのジョラシャンコ (タゴールの生家) によく行き来し、芸術的素質がある学生であった。その頃シャンティニケタンに柔道を教えに来ていた佐野甚之助と知り合いになった。

ムクル・デはインドで初めてドライポイント銅版画を学びに海外に行った。一九一六年と一九一七年に二〇歳のころタゴールに随行して来日した。目的は日本とインドの美術の微妙な差異を探ることであった。タゴールが日本への随行者として若いムクル・デを選んだのは彼にはすぐれた美術家になる才能があると考えたからである。ムクル・デは日本が美術の国であることと岡倉に随行してきた日本人とタゴールの努力により文化交流が始まったことだけは知っていた。彼の両親は心配したがタゴールが彼らを納得させたのである。

日本へ行く前に思いもしなかった重要な出来事があった。それは、ポルドワン (ベンガル州の地方の名前) の王様のビジョイチヨンド・モハタブ (Bijaychand Mohatab) がムクル・デの描いた二枚の絵を八〇〇ルピーで購入してくれたことである。ムク

ル・デの著書 *Amar Koha* (自分の話) でこのことについて次のように書いている。「この出来事は他の人にとってあまり重要なことではないかもしれないが、私にとっては心に残った出来事であった。たぶん私は画家になれたと言ふことなのかもしれない。¹³」*Amar Koha* という本は、船で一か月過して日本に着いたこと、日本人がタゴールを「第二のお釈迦さま」と呼んで大歓迎したこと、横山大観、佐野甚之助、日本の要人たちの集まったこと、大観と一緒に富士山を見に行ったこと、大観と親しくなったこと、タゴールにいつも随行し、日本、日本人について見聞したことなどが書かれている。

一九一六年五月三日コルカタを出発し、アメリカへ行く途中、五月二十九日に神戸に到着した。ムクル・デのほか英国人のピアソン (William Winstanley Pearson)¹⁴とアンドリユース (Charles Freer Andrews)¹⁵も同行した。日本では大観の世話を受け、東京と横浜に滞在し、横山大観と下村観山の下で版画、模写やドライポイント銅版画を学んだ。横浜ではタゴールとムクル・デは有名な絹の商人である原富太郎の三溪園に滞在し、日本画と中国の古典派を習得、そして雪舟等楊の名作にも触れていた。

三溪園を訪れた日本人の画家の荒井寛方、下村観山などに日本画の技術を教った。自分の書いた絵も見せ、たくさん彼らに褒め

られてもいる。タゴールはロテイインドロナト・タゴール *Rabindranatah*、タゴールの息子）への手紙に「彼は二枚ほどの日本画を描き、こちらの有名な人々に褒められている。」と書いている。また別の手紙に「ムクル・デを日本において行く、こちらで習いたいことが数えきれないほどあるようだ。」と書いている。東京大学の美学部の学生とともに三溪園でタゴールの通訳をし、後に同学部の教員になった八城由紀夫は、ムクル・デについて次のように書いている。「タゴールはたびたび荒井が日本画を模写するのを観察していた。¹⁶ タゴールはこの模写の技をインド人に是非習ってほしいと思っていたのかもしれない。ムクル・デはこれに一番適している。日本にいる間に習ってインドに伝える。間違いない。ムクル・デは美術の世界で大活躍するに違いない。¹⁷」

日本にいる間に大観が開催した展示会に感動し、大観と一緒に様々な所に行き、日本美術の細かい部分までの技を学び、日本画をいくつか描いた。それを見て大観はもちろん荒井寛方、原富太郎などは彼の才能を認め、また日本画の指導者になれると考え、一〇年間の奨学金を支給しようとして申し出た。ムクル・デは大変喜んだが、タゴールはこの提案を受け入れなかった。タゴールは彼の両親と一緒にインドに戻ってくると約束したからであると思われる。

日本の後、アメリカに行き、また一九一七年日本に戻ってきた。二月四日東京朝日新聞や大阪朝日新聞にムクル・デは横山大観の内弟子になると言う記事も出た。結局タゴールの許可を得られずこれは実現しなかった。短い期間だったが今回も原富太郎と大観の世話を受け、日本の美術を鑑賞した。そこでアメリカやヨーロッパの絵画との相違点をも感じた。日本の絵はヨーロッパを真似しているわけではなく、空想からも離れ、人生における現実を描いているのであると彼は語っている。

一九一七年三月十日タゴールと一緒にムクル・デはインドに帰って来た。

五 荒井寛方が与えたムクル・デへの影響と業績

印日文化交流に力を注いだ荒井寛方は日本絵画協会共進会からアジャインタ壁画¹⁸を模写するために派遣された。またタゴールにも招かれて、ピチットラ美術学校の絵画教授として一九一六年十二月十七日に渡印した。インドでの滞在期間は一年半で、帰国したのは一九一八年五月十一日だった。寛方はシャンティニケタンとジョラシャンコで日本画を教える一方、インド独自の画法を身に着けると仏教のお寺やヒンドゥー教の聖堂や洞窟などの美術も学んでいった。

すでに荒井と友人だったムクル・デはインドでより親しくなった。荒井寛方によって書かれた『インド訪問日記』では荒井はどのように書いている。「ムクル・デは印度の服をお土産にくれた。すぐに私は着てみた皆が喜んでいた。¹⁹」

インドに帰って来てから半年後一九一七年七月にムクル・デは父親を亡くした悲しみを癒すため、アジャンタへ向かった。そこで思いがけなく会ったのは荒井寛方であった。荒井寛方がムクル・デと偶然の再会について次のように書いている。「荒井さん、荒井さんと言って誰かが跳んで現れてきた。ムクル・デであった。²⁰」アジャンタでの自然の恵み、花々、そして滝を見て美術の新しい扉が開いたかのように見えた。その上、日本人の画家ら（野生司香雪など）と出会い画家になるための道をさらに前進させたのである。そこで、荒井寛方と一緒に住み、彼らの壁画の模写を出来るだけ助けた。アジャンタの一番目の洞窟で、「ブッダの誘惑」を模写していた寛方の画法を見て、感動した。また、日中のみならず夜にはガス灯で模写していた姿は、彼に多大な影響を与えた。荒井寛方の模写作業に立ち会う機会を得て、アジャンタのフレスコ壁画の模写を行うことを心に決めた。数日後にムクル・デはアジャンタを離れた。続いて、荒井寛方も帰国した。精神的にも、経済的にも準備して、一九一九年にムクル・デは

アジャンタに再び向かった。そこで一人で一年半ぐらい過ごし、一日中模写し、時々気分に乗ったら徹夜して画を模写した。夜の闇の中に洞窟を巡り、外とは異なった世界で苦しみながら壁画模写や絵画制作のみに励んだ。ムクル・デは彼の *Amar Kotba* (自分の話) に書いている。「アジャンタから帰って来た時、正直泣きそうになった。とても苦しみながらも愛していた。」そしてアジャンタでの経験をもとに *My Pilgrimages to Ajanta and Bagh*, (一九二五) (アジャンタとバークへの私の巡礼) を著して高い評価を得ることとなる。

また、ピアソンとの好意により一九二〇年から一九二七年にかけてイギリスで美術を習得し、*Victoria and Albert Museum* で展示会を行う機会も得て好評も受けた。インドに帰った後で一九二八年、公立美術専門学校 (*Government College of Art*) の学長として任命され、一九四三年までそこで活躍した。そして当時インドを訪れた日本人と連絡をとって世話をし、時々その日本人たちは彼の家に泊まることもあった。美術専門学校ではたびたび彼らの絵画の展示会も開いて印日交流の懸け橋になった。

現代インドの美術の先駆者のムクル・デの孫息子のシヨットシユリ (*Satyashri*) とシボシユリ (*Shiboshi*) により、二〇〇二年にムクル・デのシャンティニケタンにある家「チトロレカ」

(Chitrolekha)の一部にムクル・デ・アーカイブが設立され、二〇〇三年にウェブサイトも開設された。²¹一九八九年ムクル・デの逝去後、彼のような写真、新聞記事、手紙の編纂が始まった。二〇〇五年に *Japan theke jorasuko* (日本からジョラシャンコへ)も発行している。そして、二〇一五年九月に同書は再版された。またムクル・デの貴重な書類のデジタル化も進められている。

六 日本人と結婚したインド女性—ホリプロバ・タケダ

日印の交流の中で、日本人とインド人の国際結婚の例に注目してみたい。日本人とインド人の結婚としては、ラスビハリ・ポース(一八八六—一九四五)と中村屋の娘・相馬俊子の結婚は有名である。また、結婚ではないが、恋愛関係で有名なのは、岡倉天心とインドの女流詩人の間で交わされた恋文は、本にもなっている。ここで取り上げるのは、武田右衛門とベンガル人の女性ホリプロバ・モツリカの結婚である。両人が結婚したのは一九〇七年(明治四十年)であり、日本人とインド人の結婚としては最初の例ではないかと考えられる。

ホリプロバ・モツリカ (Horiprova Malika 一八九〇—一九七二)は、一八九〇年(明治二十三年)に東ベンガル(現在のバン

グラデシユ)のダッカ近郊のキルガオ村に生まれたのだが、幼いころに道端に捨てられていたのを、シヨシブソン・モツリカ (Soshubuson Malika) が拾い上げて育てたのである。

シヨシブソン・モツリカは、ヒンドゥー教改革派のブランモン協会 (Brahmo Samaj) のメンバーになっている。²³ ブランモン協会は、ラムモホン・ライ(一七七四—一八一五)が設立したヒンドゥー教改革派であり、詩人のロビンドロナト・タゴールの父、デベンドロナトがラムモホン・ロイの後を受け継いだ団体でもある。ロビンドロナトもブランモン協会の事務局長を務め、彼の設立した学園シヤンティニケトンは、このブランモン協会の教理・思想を教育の根幹に置いている。²⁴

ブランモン協会は、社会改革運動にも取り組んだ。シヨシブソン・モツリカも、一八九二年に衣食住に困っている貧しい女性、乳幼児や障害をもった人たちのための施設「マティリニケトン」(matirniketan, 母の里)を創設した。その施設で、娘のホリプロバも介護人として奉仕した。そのことがきっかけで、武田右衛門と出会った。²⁵

武田右衛門は、高知県に生まれ、ダッカにあった「ブルブル」という石鹸工場で製造の仕事に従事していた。ホリプロバと右衛門は家族の許しを得て、一九〇七年に結婚した。ホリプロバは、

一七歳であった。彼女はホリプロバ・タケダ、日本式には、武田ホリプロバになったのである。ホリプロバの父、シヨシブソン・モツリカは、娘のことを思い、ダツカに「Indo-Japanese Soap Factory」（インドー日本石鹸会社）を設立した。シヨシブソンはこの会社の収益の一部を、マテイリニケトンに寄付した。

一九一二（明治四十五）年に、武田夫妻は、日本を訪れることになった。武田は、両親が高齢であり、長い間日本を離れていたことから、帰国することにした。ホリプロバには、夫の故国、日本を訪ねてみたいという思いもあり、義父母からたびたび心温まる手紙をもらっていたこともあり、義父母に会いたいという気持ちもあった。当時、女性が、異国の地へ行き、しかも、場合によっては二度と故国に帰ってこないかもしれないということは驚くべきことであった。このことを聞きつけたダイナージプルのバハドール藩王は、二人に二五ルピーを、商人のコハラ氏は、五〇ルピーをはなむけに与えた。また、出発の前日には、ブランモ協会で、旅の安全を祈って、儀式が行われた。出発日の十一月三日には、ナラヨンゴンジ村の汽船上陸場には大勢の人が集まり、涙ながらに夫妻を見送った。²⁶

六日には、コルカタから日本行きの船に乗って出発した。彼女の著作 *Bongomohilar Japanyatra*（あるベンガル夫人の日本訪

問）によると、乗った船は、貨物船で、羊やヤギなども積まれ、一緒に過ごすには悩まされ、干し魚の匂いにも苦しみ、嵐にも襲われたこと、ベンガルの弦楽器エスラージを弾いて楽しんだことが述べられている。船は、ラングーン、シンガポールに寄港して、十二月十三日に門司港に着いた。たくさんの人に温かく迎えられる、日本人になったベンガルの花嫁は、神戸双日新日報に「真つ黒の嫁御寮―本邦人にて初めて印度人を娶りし人」というタイトルで紹介された。

四か月日本で過ごしてから、一九一三（大正二）年四月十二日に武田夫妻はダツカに帰った。その二年後、ホリプロバは、日本での体験について前述の『あるベンガル夫人の日本訪問』を出版した。マテイリニケトンに資金的に援助するためであった。日記風に書かれたものだが、観察力が鋭く、当時のベンガルと日本の社会・経済の状態もよく記述している。

第二次世界大戦が始まると、日本政府はインドにいるすべての日本人に帰国するように命じたため、一九四一（昭和十六）年武田夫妻は日本に帰国することになった。戦時中でもあり、親戚はどこにいても分ならず、戦災で家も焼かれ、住むところさえなかった。その上、右衛門は病気にもなった。

このような状態の二人に手を差し伸べたのが、ラスビハリ・ボ

ースであった。彼の紹介で、スバス・チャンドラ・ボースにも会い、東京ラジオ放送局でインド国民軍（アジャード・ヒンド・フオウジ、Ajad Hind Fouj）のベンガル語による放送のニュースキャスターの仕事に就いた。このラジオ放送は、インド独立運動を推進させる有力な武器となった。放送を通して、イギリスに対する非難のメッセージを流し続けた。空襲に頻繁に襲われる東京に住み、ヘルメットをかぶって、東京ラジオ放送局まで一九四二（昭和十七）年から一九四四（昭和十九）年まで二年間通い続けた。一九四五年の日本の敗戦の二年後、一九四七（昭和二十二）年に、ホリプロバは、病身の右衛門とともに、インドに帰った。彼女のふるさとは、パキスタンになっていたため、インド西ベンガル州のジョルパイグリ（市の名前）にあった妹の家に住ませてもらうことになった。その翌年、一九四八年に右衛門は亡くなった。「ダッカの現代女性」と呼ばれるようになったホリプロバは、一九七二年にコルカタで亡くなった。

一九九九年、バングラデシュ人のジャーナリストのマンズール・ハク氏は、ホリプロバの旅日記を発見し、ダッカから再発刊した。²⁷そして、二〇一二年、ホリプロバの初来日の一〇〇周年と（いう）とで、映画監督のタンヴェイル・モカッメル（一九五五年—）が *Japanese Bothu*（日本の婦人）というホリプロバについてのベ

ンガル語の映画を製作した。

ベンガルと日本の民間交流の年表——一九九〇年代—一九六〇年代

一八九三年 スワミ・ヴィヴェーカーナンダ (Swami Vivekananda) が世界宗教会議に出席する途上で日本を訪れた。

一九〇二年 岡倉天心と堀至徳のインド訪問。岡倉とタゴール家の親交始まる。

一九〇三年 横山大観、菱田春草はタゴールの招待でカルカッタ（現在のコルカタ）訪問。タゴール邸に滞在し日本の技法を紹介。二人は堀至徳とも会っている。

一九〇五年 佐野甚之助シャンティニケタンで柔道と日本語を教える。

一九〇六年 カルカッタ日本総領事館開設（三月十六日）。

マンマタナト・ゴーシユ (Mamathanath Ghosh (一八八二—一九四四)) とスレシユチョンドロ・ボンドパッダエ (Suresh Chandra Bandyopadhyay) が来日。

一九一〇年 *Japan Probash*（国外の日本）と *Sekaler Bangla*

Samojik Potre JAPAN（当時の日本に関する新聞記事の編纂物）を発行。

- 一九二二年 岡倉天心、二回目のインド訪問（九月）。
- 一九二七年 タゴール、第二回日本訪問（ムクル・デ随行）。
- 一九一九年 ホリプロバ・タケダ（Horiprova Takeda）一八九〇—一九七二）が来日。一九一九年 「日本への旅人」が『緑色の葉』（*Sabujpata*）誌に掲載される。
- 一九二二年 ロビンドロナト・タゴール、ノーベル文学賞受賞。一九二二年 タゴールの修養道場学校がヴィシユヴァ・バラテイ大学へと発展。
- 一九二三年 岡倉天心没。一九二三年 ショルカルが *Nobin Asiar jommodata Japan*（新しいアジアを興した日本）刊行。
- 一九二五年 荒井寛方、シヤンティニケタンで日本画指導。一九二四年 タゴール、第三回日本訪問（キテイモホン・セン、ラスビハリ・ボースは日本へ亡命。一九二四年 タンドラル・ボース随行）。
- ホリプロバ・タケダが *Bongomohitar Japan-jatra*（あるベンガル夫人の日本訪問記）を刊行。また、一九二九年 タゴール、第四回日本訪問。タゴール、第五回日本訪問。高垣信造が柔道師範としてシヤンティニケタ *Japan*（隠れている本日）を刊行。一九二九年 タンに。
- 四月七日にジャガディッシュ・チョンドロ・ボース（*Jagadish Chandra Bose*）が来日、五月一日早稲田大学で講演。一九三〇年 パルク・ハリハラン（一九〇五—一九七〇）が陶芸を学びに来日。
- ビノイクマル・シヨルカル（*Binaykumar Sarkar*）一九三五年 平等通照（後のヴィシユヴァ・バラテイ大学日本学院設立委員長）、シヤンティニケタンでサンスクリット修辞学を学ぶ。
- 一八八七—一九四九）が訪日（六月）。一九三五年 高良とみ（タゴール日本滞在中、通訳を務める）、オボラ・ボースが六月ごろ来日。一九四一年 シヤンティニケタン訪問。
- 一九二六年 タゴールが日本を初訪問（五月—九月、ムクル・デ随行）。
- 一九四一年 荒井寛方が十二月十七日渡印した。ロビンドロナト・タゴール没。

- ホリプロバ・タケダ (Horiprova Takeda) 来日。
 一九四三年 スバスチャンドラ・ボース、日本訪問、支援を受ける。
 一九四六年 極東軍事裁判にてインド代表判事のパール判事が日本人戦犯七人の全無罪を主張。
 一九四七年 八月十五日イギリス植民地支配からインド独立。
 一九五一年 ヴィシユヴァ・バラテイが国立大学となる。
 一九五四年 ヴィシユヴァ・バラテイ大学に日本学科創設される。
 一九五五年 春日井真也が同大学の日本語教授になり、一九六四年まで勤める。

参考文献

1. NPO法人揚輝荘の会(二〇〇八)『揚輝荘と祐民「よみがえる松坂屋創業者の理想郷」』風媒社
2. 坪内隆彦(一九九八)『岡倉天心の思想探訪「迷走するアジア主義」』勁草書房
3. Ghosh, Mammathanath (1910). *Japan Probash*, the Empire library, Calcutta(2012) editon, ed.by Subrata Kumar Das.
4. Maeda, Sengaku (2008). *Compiled, Path from India Path from Japan: Lecture Series on Japan-India Relations*, (Shuppan Sinsha, Japan), English Translation, New Delhi: Northern Book Center.
5. Keeni, Gita (2010). *A study of Japanese Language at Visva—*

- Bharati, Saniniketan-its past, present and future prospects, in P. A. George, eds. *Japanese Studies: Changing Global Profile*, New Delhi: Northern Book Center. pp. 257-274.
6. Okakura, Kakuzo (1973 reprint), *The Ideals of the East*, Indian Edition: Calcutta.
 7. 春日井真也(一九八一)『インド近景と遠景』同朋舎
 8. 平等通昭(一九六九)『古き印度の旅—印度仏蹟紀行』印度学研究所
 9. Tayal, Skand R. (2014). *India and the Republic of Korea: Engaged Democracies*, with foreword by C. Raja Mohan.
 10. 横澤淳 作成(二〇一〇年頃)『ヴィシユ・ハロテイ大学日本学科図書館編「シヤンティニケタン」日本 文化交流史』年表』
 11. Sarker, Probir Bilkash, (2008). *Jana Ajana Japan I* (知ってる—知らなくる日本—) Dhaka: Manchiro Publishers.
 12. Vishwanathan, Savitri 「インネ—日本：変化する認識」(09. 15. 2016 入手) https://www.jpif.go.jp/j/about/award/.../Savitri_Vishwanathan.pdf
 13. Dey, Mukul Chandra (2005). *Japan Theke Jorasako, 1916-1917*, New Ej Publishers.
 14. Dey, Mukul Chandra (1995). *Amar Katha*, ed. Visva Bharati Kolkata.
 15. Azuma, Kazuo (2004). *Japan wo Robindranath: Sotoborsher Binimoy* (一〇〇年の日本ヨーロッパ交流) N E publishers, Kolkata
 16. Arai, Kanpou (Translated By Kazuo Azuma) (1993). *Bharat-Bhraman Dinoponji*, Kolkata

17. Azuma, Kazuo (1998). *Prasango Rabindranath o Japan*, Kolkata
18. Dey, Mukul Chandra, (1925). *My Pilgrimages to Ajanta and Bagh*, ed. by Laurence Binyon, London
19. 佐藤志乃 (一九九八)「朦朧体とベンガル・ルネサンス」横山大観、菱田春草がオポニンドロナト・タゴールに与えた影響について(一)『筑波大学芸術学研究誌』筑波大学芸術学系芸術学研究室
20. 溯河編集部『溯河 Ujan-Jatri』第十、溯河編集部発行、一九九九年
21. 溯河編集部『溯河 Ujan-Jatri』第十三、溯河編集部発行、二〇〇二年
22. 前田専學 (監修)、『インドからの道 日本からの道—日印交流年』連続講演録』出帆新社、二〇〇八年
23. 山崎利男、高橋 満 編『日本とインド交流の歴史』三省堂選書、一九九三年

注

- 1 NPO法人揚輝荘の会理事田中進氏がハリハランについて研究している。彼は二〇一四年三月十七日にヴィシュヴァ・バラテイ大学日本学科で「伊藤祐民とタゴールの出会い」と「P・ハリハランの活動」という著作に基づく記録ビデオ⁶を上映した。その著作はNPO法人揚輝荘の会(二〇〇八)『揚輝荘と祐民「よみがえる松坂屋創業者の理想郷」』風媒社を参照。
ムクル・デについては我妻和男がベンガル語の *Japan o Rabindranath: Soborsher Binimoy* (二〇〇〇年の日本とロビンドロナト交流) とこの本を書いている。また、Sarker (二〇〇八)、Dey (二〇〇五)、二〇〇二年に設立された「ムクル・デ・アーカイブ」の新聞記事、写真なども参照。

- ホリプロバ・タケダについては、バン格拉デシュのジャーナリスト、マンズルル・ハク氏はロンドン大学 India Office Library でホリプロバ・タケダの旅日記のマイクロフィルムを発見し、コピーして一九九九年二月にタッカから *Bongomohilar Japangitruwa* を再発行した。この著書の翻訳は、富井敬訳「あるベンガル人の日本訪問記」『溯河 Ujan-Jatri』第十、一九九九参照。「あるベンガル人の日本訪問記(続編)」『溯河 Ujan-Jatri』第十三、二〇〇二年も参照。
- 2 Maeda (2008), p. 1.
- 3 山崎利男、高橋 満 編『日本とインド交流の歴史』一三三ページ。
- 4 <http://ameblo.jp/seiwakaisenken/entry-11099130682.html> (14.12.2016入手)
- 5 Subrata Kumar Das, "One hundred years back Japan in the Eyes of Bengal" Aug. 20. 2016 https://www.academia.edu/3576781/Japan_in_the_Eyes_of_Bengal
ヴィヴェーカーナンダが来日した時にベンガル人がいたことについて書いた素材は不明であるがその書簡や講演の際に日本に関して語ったものと思われる。
- 6 もともと名前はホリプロバ・モツリカだったが高知県出身の武田右衛門と一九〇六年に結婚し、ホリプロバ・タケダになった
- 7 同書、p. 5.
- 8 以下のハリハランに関する記述は、田中進と彼の弟子加賀谷氏の研究に基づいている。写真は田中進が提供。
- 9 『愛知商工』一八六号、愛知商品陳列所、昭和八年四月二十五日発行
- 10 写真1と2はハリハランの作品である。
- 11 『時事新報』一九三六(昭和十一)年八月二十一日、神戸大学経済経

- 営研究所新聞記事文庫文化(三〇九〇)、データ作成:二〇一〇年三月 神戸大学附属図書館。
- 12 佐藤志乃(一九九八)「朦朧体とベンガル・ルネサンス:横山大観、菱田春草がオポニンドロナト・タゴールに与えた影響について(一)」参照。
- 13 Mukul Chandra Dey(1995)*Amar Katha*.
- 14 ピアソンはマンチェスターに生まれ、一九〇七年にインド、コルカタに来て、ヴァバニプルにあるLondon Missionary Collegeで教えた。一九一一年タゴールと会い、後にシャンティニケタンの教師となった。
- 15 アンドリユースはイギリスに生まれ、キリスト教の宣教師、教育者。インド社会的改革者でもあった。一九一二年にタゴールと会い、後にシャンティニケタンで過ごした。彼はガンディーとも親しい。
- 16 タゴールの依頼で荒井寛方は下村寒山の「弱法師」と横山大観の「游刃有余地」という絵画を模写した。
- 17 Azuma (2004), p. 107.
- 18 アジャンタは、一〇〇〇年を超えて甦ったインド仏教美術の至宝である。マハラシシュートラ州北部、ワゴラー川を囲む断崖を五五〇mにわたって断続的にくりぬいて築かれた大小三〇の石窟で構成される古代の仏教石窟寺院群である。
- 19 Kampo Arai, *Bharat-Bhawan Dinoponji* (Kazuo Azumaによせて) ンガル語翻訳(1993), p.35.
- 20 同書 p.50.
- 21 <http://www.chitralekha.org/> (07.07.2015入手)
- 22 ショシブソン・モッリカはダッカに生まれ、ヒンドゥー教改革派のプランモン協会のメンバーであった。生活に苦しむ女性や乳児と幼児対象の「マティリニケトン」(母の里)と云う施設を設立した。家族については不明である。
- 23 Doinik Prothom Alo, (16.08.2016入手)
- 24 ラムモホンとデベンドロナト・タゴール、そしてプランモン協会については、竹内啓二『近代インド思想の源流―ラムモホン・ライの宗教・社会改革』新評論、一九九一年を参照。
- 25 溯河編集部『溯河 Ujan-Jatri (第一〇)』、一九九九、三三ページ。
- 26 溯河編集部『溯河 Ujan-Jatri (第一三)』、二〇〇二、六九ページ。
- 27 溯河編集部『溯河 Ujan-Jatri (第一三)』、二〇〇二、六八ページ。